

作／田口浩一郎

劇団！王子の実験室 第六回公演

10min. 夢記 2011

男2と女、歌いながら入場。その後ろから、セコセコと七輪を運ぶ仕草の男1。男2はギターを抱え、女はパンキッシュなファッション。男1と女、何か曲を作っている様子。

火を起こそうと、たった一人で悪戦苦闘する男1。男2と女、何が可笑しいのか大笑い。

男1 こらあ！（少し情けない様子で）

男2 え？

男1 なに遊んでんだよ、お前らはあ！

男2 遊んでないよ。

女 この人が、最後に作品を残そうっていうから。

男1 作品？

男2 そう。

男1 どうすんですか？そんなもん作って。

男2 生きた証を…。

男1 残りませんよ、そんなもん今作ったって。

男2 だからいいんだよ。

男1 え？

女 別に他人ひとに聴かすために作ってんじゃないのよ。

男2 刻むんだよね、世界に。(至ってへらへらと)

女 ね。

男と女、歌い出す。

男1 自己満足か

男2 …そういう言い方ないでしょうに。

男1 誰も聞いてない音楽は自己満足ですよ。それより手伝って下さい。死ねませんよ、このままじゃ。

男2・女へーい。

男2と女、練炭の火をつけるのを手伝う。咳込む。

女 真面目だよね、キングさん。

男2 几帳面だよね、キングなのに。

女 デリケート・キングだね。

男2 デリ・キングだね。

男2と女。笑う。

男1 嫌いなんですよ。中途半端なものが。

男2 はは、さすがお役人。

男1 まあ、市役所ですけどね。

男2 …いいじゃん。市役所。カタくて。

男1 偉そうに人の中途半端をなじる割には…自分が中途半端で。

男2 じゃあ、この作業もこのへんで切り上げて…。

女 曲作ろうぜ、曲。

男1 ダメです。

男2 何で？

男1 不完全燃焼しなきゃ、死ねないでしょ？

男2 うん。

男1 完全に不完全燃焼させたいじゃないですか。

男2 ああ…。

男1、フーフーと炭を拭く。咳き込む。

女 …先は長そうだね。

男1 スーパー梵天丸さんは。

男2 うん？

男1 どうして死のうと思ったんですか？

男2 ああ…そうねえ…別に。

男1 ？

男2 死んでもいいし、死ななくても…まあ。

男1 はつきりしないなあ。

男2 死にたいとか、死にたくないとか以前に。

女 …うん。

男2 この世に執着が持てないんだ。

女 執着？

男2 二十代の頃はね、人間が怖かったんだけどさ。

男1 対人恐怖症かなんか？

男2 ああ、そうなのかな。

女 意外。

男2 まあ、でもね…これじゃいけないって、克服したわけ。

女 偉いじゃない。

男2 いや…人間に対して無感動になったんだよ。

男1 ふむ。

男2 だから…怖いと思ったり、偉い人を尊敬したり、女性に対して緊張したり…そういうのを一つ一つ分析したんだ。そうしたら…。

女 待って。

男2 え？

女 それ、長い？

男2 まあ。

女 あー、あたし無理、長いの。

男2 えー。

女 歌で表現してよ、ねえ。

男2 は？

女 あんた、ミュージシャンなんだから。

男2 えー…。(嫌そうにしながらイソイソとギターの準備を始める)

男1 ヤル気満々じゃないですか。

男2 じゃ、いくよ。

男1と女、拍手。なんか、よくわからない歌。内容は…以下を参考にして下さい。

『何てことない、ただの人間。過大評価してたのかな…人間を。とにかく、冷静に分析した結果、僕は人間に対する尊敬を捨てた。同時に、僕はこの世界に対する執着を失ってしまったんだ。…拒絶された人間の群れに、必死に戻ろうとしたのが僕の二十代だったから。』

女 なにこれ。

男 「生きてる意味がわからない」の歌。

女 本当にわかんない、意味が。

男1 まあ、だから、人間が肉に見えるってことですよね。

男2 近いかも。

女 ホント？

男2 人間が肉に見えたら…世界も『モノ』に見えちゃって。

女 モノ…。

男2 そうしたら、何もかもが無感動で…何か生きてても、もうしようがないじゃんって…。

自殺サイトを立ち上げたのもさ、ただ僕みたいな気持の人が他にもいるのかなってさ。

女 いいわね、そんな曖昧な理由で死ねて。

男1 そういえば、ミルクィモンキーベイビーさんは何で死にたいんですか？

女 ミルクィって呼んで、長いから。

男1 じゃ…じゃあ、ミルクィ。

女 借金ね。

男1 ああ…。

女 始まりは親の離婚だった…。

男2 おお、典型的。

女 親権は親父が取ったからさあ…兄妹きょうだい3人、仲良くついて行ったわよ。(ここで男2、サス

ペンスフルな音楽を流す)…いいわよ、盛り上げなくても。

男1 で、続きは？

女 男ってね、知ってる？キングさん。

男1 は？

女 だらしないのよ。(男2、ギターをトーンアップ)だから、盛り上げんなつーの。…上の兄貴二人はね、働きもせず、家に金など一切入れなかったわ。…あたしはストレスからリストカットを繰り返し、見ての通りのバンギャルに…。(次第に盛り上がるギター)…ある日、意を決して消費者金融へ、順番待ちのむじんくんから出て来たのは、私の親父だったわ。わかる？この気マズさ。

男1 いやあ…。

女 父は、私に話した。長男と次男の借金で、我が家の経済は火の車…自分は…臓器を…臓器を売る積りで…。

男1 ヤメテー！（ギター止まる）

女 …。

男1 何で…何でもつと優しくなれないのお！

女 うん…だからね、私、決めたの、自分に保険金かけて死のうつて…。

男1 ええ！

女 もう、うんざりだし。いくばくかでもお金になって、この世からオサラバできれば…。

男2 自殺つておらないよ、保険金。

男1 ああ…そうですよ。

女 だから、頼んであるの、信用のおける人に。死んだら偽装してくれつて…事故に。

男2 彼氏？

女 モト彼。

男1 今日のこと、話しちやつたんですか！？

女 大丈夫よ、あの人なら。

男1 困るなあ…そういうことされると。

女 …あたしだつて、こんなこと話す気なかつたのに。

男2 話しちやうよねえ…こんなオッサン二人と。

女 間がもたないもん。

男2と女、笑う。

男1 ふん…自分だつていい歳でしょうよ。

女 ぶっちゃけ、もつと人数多いと思つてた。

男1 …。

女 広すぎるよ、この部屋。何でこんな部屋借りたの？

男1 用事が出来たんだつて。

女 は？

男2 もつと、いっぱいいたんだけど。

男1 仕事なんだつて。都合が悪くなつたんだつて。

女 死にたい人が、都合？

三人、笑う。

男1 有給使えつての。

女 それも変だけどね。

男2 僕なんかね。

女 うんうん。

男2 水に浸けて来ちやつた。ケータイ。

女 え！

男2 もう、この世に戻らない積りで。

女 エライ！

男2 えへ。

女 よし、じゃあ私も。

男二人、拍手。

女 どこ？水。

男1 そこに消火用の水がありますから。

女 消火用。

男1 ええ、火事になったら危ないでしょ？

女 …。

男1 使つて。あと、ペットボトルの水もあるけど、もつたいないよね。

女 ペット？

男1 危ないじゃん、熱中症とか。暑くなるし。

女 …。

男1 あー、水道は止めてあるよ。もつたいないでしょ、一日しか使わないのに。

女 キングさん。

男1 はい。

女 もうちよつと本気になろうよ。

男1 は？

女 死ぬ気ある？

男1 ありますよ。だから、こんなに念入りに準備を…。

女 …(ため息)。

男1 じゃあ、私の死にたい理由も聞いてもらおうかな。

男2 中途半端な人生だったからじゃないの？

男1 違いますよ。失恋です。

女 失恋？

男1 ええ、それはもう劇的な。

間。

男1 聞きたいでしょ。

男2 まあ…ええ。

男1 あれは、僕が大学を卒業してすぐでしょうか…二人の出会いは12年前。初めて訪れた、西海岸ののヨットハーバーでした。彼女は赤いリボンの…。

女 それ、長い？

男1 あ…まあ。

男2 じゃあ、歌で表現。

男1 嫌ですよ。

女 イエーイ！（拍手）

男1 ちよ…。

男2、ギターをかき鳴らし始める。男1、文句を言っていた割にはためらいもなく歌う。内容については以下参照。

『運命の再会。しかし、その瞬間、あの懐かしい橋から彼女は身を躍らせました。そして、彼女の命は永遠に失われたのであります。』

膝をつき、嗚咽を漏らす男1。啞然として拍手をする二人。

女 何だか知らないけど…ごめんね。辛いこと思い出させて。

男1 いえ。

男2 気をとりなおして。人生、悪いことばかりじゃないからさ。

男1 ええ。

女 でも…。

男1 …。

女 もう終わるよ。

全員で七輪を覗き込む。沈黙。

男2 ……そうだね。

女 ……そろそろ…火が回ったかな。

男1 ……ええ。

女 ……暑いね。

男2 ……うん。

ここで男1、寝そべる。怪訝に見つめる男2と女。

男1 寝て…待ちましょう。

目を見合せ、頷く男2と女。3人、七輪を中心に三角形に横たわる。男2、ギターをつま弾きながら、女はうつぶせに。間。

男1 ミルキーさん。

女 なに。

男1 間違ってます。

女 は？

男1 仰向けになって、目をふせて、手はここにこう（そのあたりに組む）、これが正しい姿勢です。

女 あたし、こうじゃなきゃ眠れないのよ。

男1 梵さん。

男2 ハイ？

男1 死ぬ時ぐらいギター置いて、で、手はこう。

男2 寝る前に、一回弾かないと落ち着かないんだけど。

男1 ダメ！手はここ！

男2 …なんで？

男1 自殺マニュアルの挿絵はこうだったんです！これが正しい姿勢！

女 マジメだなあ。

男2と女、ブーブー言いながらも男1の言うことを聞く。

女 あー…、やっぱダメ。(うつぶせになる)

男1 あ!

男2 それ、楽そうだな。(うつぶせになる)

男1 あー!…あ、あ…じゃ、僕も。

男1、うつぶせになる。

女 なんだ、自分だつてダメじゃん。

男1 だつて!僕だけ仰向けつて…なんか、なんかイヤ!

女 じゃ、やーめた。

男2 ボークも。(女のマネ)

男1 あー!(後に続く)

その後、女が姿勢を変えることに、男二人が続く。

女 ねえ…練炭自殺ってさあ、苦しいの？

男2 うーん、窒息死だからねえ…一説によると気持ちいいらしいけど。

女 ふーん。…ねえ。

男2 はい？

女 暑くね？

男2 そりゃ、暑いよ。火、焚いてんだから。

女 クーラー、つけね？

男1 ダメ！

女 なんで？

男1 クーラーなんかつけたら、外の空気が入って来るでしょ！そしたら、死ねないでしょ！

女 何で？

男1 くあー！知らなかったのか！

男2 あのねえ、コレ（練炭）に火いつけるでしょ？

女 うん。

男2 そうしたら、不完全燃焼しーの。

女 うん。

男2 毒ガス出ーの、窒息しーの、死にーの。

女 あー。

男2 クーラーなんかつけたら、外の空気入って来ーの、毒ガス逃げーの、死ねねーの。

女 OH！死ねねーの！

男2 死ねねーの！（ギターをかき鳴らす）

男1 はあ…。

女 イイねえ、アメリカなカンジで！

男2 どっちかつたらイタリアンかもね…。

女 生まれ変わったら、あたし絶対アメリカン。

男2 は？

女 だって、フリーダムなカンジじゃん！アメリカ人。あれ、見たことある？デイランとかブ

ランドンとか出て来る…ほら、ビバ…ビバ…ビバ…ビーバップ・ハイスクール。

男1 ビバリーヒルズ高校白書ね。

女 そう！それ！いいよねえ、高校生のくせにスポーツカー乗っちゃってさ。みんなお金持ちだしさ。フリーダム！

男1 そりや、金持ちならフリーダムでしようけど。
女 でえ、あたしは歌手になる。
男2 歌手？
女 アヴリル・ラヴィーンになる。
男2 へえ。
女 顔がカワイくて、スタイルよくて、お金持ちでアメリカ人。もう、完璧。
男2 カナダ人だけどね、アヴリル・ラヴィーン。
女 いいのよ！これだけそろってれば、親父からも、兄弟からも、借金からもフリーダム！
男2 なるほど。
女 ……あー、空しい。
男2 うん…。
女 キングさんは。
男1 はい？
女 何になりたいの？
男1 私は…遊んでみたいですわね。
女 遊べば？

男1 苦手なんですよ、性格的に。もし生まれ変わったら…もう少しイイ加減に、華のある人生を送りたいです。

女 うんうん、梵さんは？

男2 もう、生まれたくないです。

女 それじゃ、つまんないじゃん。

男2 えー、うーん…友達…いっぱい欲しい。

女 へえ。

男2 つて、思える人格になりたい。

女 何ソレ。

男2 今、ぜんぜん欲しくないから…。

女 あたしは、何になりたいか聞いているの！

男2 ねえ、少し静かに…死に際ぐらいた。

男1 …そうですね。

女 …はーい。

しばし、沈黙。

女
ねえねえ。

男2
…もう、なんだよ。

女
子守唄、歌ってよ。

男2
はあ？

女
さっきの、あの変な歌でいいから。

男2
…なんだって。

女
気持ちが高ぶっちゃってダメなのよ。

男2
…。

女
このままじゃ死ねないから…ね。

男2
死ねるよお。

男2、渋々ながら、あの冒頭に歌った変な歌を歌う。三人、次第に唱和。起き上がる。

男1
俺の名前はディラン・マッケイ、39歳、通称キング！ビバリーヒルズにある、ビバ・テレビのエグゼクティブ・プロデューサーだ。俺が手がける番組は、どれも大当たり。

「トウウエンティ・フォーはおいしいinベトナム」シリーズや、「刑事くろんぼ」シリーズ…
覚えてくれてる人も多いんじゃないかな？まあ、もつとも、「刑事くろんぼ」は差別的と
いうことで打ち切られたけどね、はっはっはっは！気にしない気にしない！

さて、今日も俺と組みたい有象無象から、わんさとメールが届いてるぜ！

えーと、ナニナニ…神奈川県劇団、王子の実験室の王子くんからだ！…「デイラン・マ
ツケイ様、こんにちは。」

こんにちは！

「もう、日本の演劇は飽き飽きしました。ぼくは、どっちかというアメリカに向いてい
ると思うのです。アメリカ向きです。どうかマツケイ様の力で、全米デビューさせて下
さい」…か。

ダメだ！もう、日本の演劇界は90年代に伸びきったのだ。そんな伸びきった演劇シー
ンで、勝ち抜けないお前はクズだ！削除！

くう〜！言つとくが、俺が一番大事にしてるのはフリーダムだ！仲間内で閉じちまって、
隣近所に気を遣って言いたいことも言えない、東北の山村みてえな地方劇団に用はね
えんだ！削除！削除！

さあ、次のメールは、俺のフリーダムに火をつけてくれるかな！

「OB各位 あの懐かしいサンタモニカのクラブハウスで、旧交を温めませんか」
同窓会の誘いだ。

母校のビバリー高校からだった。成功者たちの子弟ばかりが通う、鼻持ちならない名門校。

数分後、俺は週末の予定をキャンセルしていた。

ハイスクールのとき、一度だけ行つた、西海岸のクラブハウスに滞在するために。

世界は、一瞬にしてヤングエグゼクティブ達と同窓パーティーへと変貌する。男1、シャンパングラスと立食の皿を持ったフリ。人込みをかき分けるジエスチャー。

男1 おっと、ごめんよ…やあ、久しぶりだな、ステイブ。ケリーも元気そうじゃないか。久しぶりにヤルか…(なぜか上機嫌にボクシングのフリ)…おっと、冗談だぜ。服にマヨネ

ーズが付いちまう。ビンゴが始まる前に食つとかないと…ああ、後でな。

ふう、人気者はまっすぐ歩くこともできねえ…おっと、電話だ…(着信を見て)チッ、能ナシが。

あー、俺だ。ん？マイケル・ジャクソンのそっくりさんが来ない？よし、じゃあタイガ

ー・ウツズのそっくりさんと呼べ。馬鹿野郎、人間オセロだろうが！黒人ならだれでも
…。

と、その時、飛び出して来た女、男1にぶつかる。

女 いったあー。

男1 あー、すまねえ。マヨネーズはつかなかったか…いいか、タイガーだぜ。またかける。

女 …ごめんなさい、他所見してたもんだから。

男1 あー、俺こそ…ミルクィー？

女 え…やだ、キング？

男1 ミルクィー！ミルクィーじゃないか！

女 懐かしいわ！覚えててくれたのね！

男1 忘れるもんか。イズミ・ミルクィー・サナ…日本から来たハーフの女の子！

男2 全校男子、憧れの的だったからな。

男1 お前は…。

女 ブランドン！あなたも来てたの！

男2 はっはっ、昔みたいにボンちゃんって呼んでくれ。

男1 いつもギター抱えてたから、ボン・ジョビって呼ばれてたんだよな。

男2 何でボン・ジョビ限定なんだろうな。

男二人、笑う。

女 二人とも間違えたわあ。

男1 まあな、多少羽振りは良くなったぜ。しかし、この分だとボンちゃんも…。

男2 金ならあるぜ。

女 まあ！ワンダフル！

男1 今、何やってるんだ？

男2 ビバリーバーガーって知ってるか？

男1 ああ、大手バーガーチェーンだな。

男2 オーナーだ。

男1 なに！？

女 WOW！グレート！

男2 今度、食べに来てくれ。

男1 今度もなにも、スポンサーと打ち合わせのときは、いつもビバリーバーガーさ。

男2 スポンサー？

男1 ああ…言つてなかったな。(名刺を配る)

男2 ビバ・テレビ！

女 エグゼクティブ・プロデューサー！

男2 凄じじゃないか！

男1 バーガー・チエーンのおーナーには負けるよ。ミルクィは？

女 え…あたし？

男2 ああ、ミルクィはどうしてるんだい？

女 あたしは…シンガーなの。

男1 シンガー！？

男2 シンガーつて、ブリトニーだのアプリル・ラヴィーンみたいな…。

女 あんなにメジャーじゃないわ。だから、あんまり言いたくなかったの。

男2 凄いぜ！バーガー屋、引退したら、俺も歌手になろうと思つてたんだ。

女 そうね、ボンちゃんは歌手が夢だったものね。…でも、私こそ、もう引退。

男2 え、どうして？

女 いい歳だもの。

男2 何言ってるんだ。音楽は年齢としでやるもんじゃないぜ。

女 そりゃ、そうだけども。

男1 オーライ、仕事の話はそのへんでいいだろう。…しかし、ミルキー。

女 何？

男1 キレイになったな。

女 やだ…もう、オバサンよ。

男2 気をつけた方がいいぜ。こいつ手が早いからさ。

男1 おい、ボンちゃん、人聞き悪いぜ。

女 でも、同窓会って危ないわよね。

男1 何が？

女 もう生まれてるんじゃないかしら？不倫カップルのひと組やふた組。

男1 ああ。

女 キング、結婚は？

男1 独身。

女 ボンちゃんは？

男2 独身。

男1・2 ミルキーは？

女 独身よ。

男1・2、分かりやすくヘアースタイルを整え始める。

男2 そういえばさ、思いださないか？ミルキー。

女 何？

男2 昔、このクラブハウスと一緒に遊びに来た事…あつたじゃないか。

女 ええ、懐かしいわね。

男1 二人で？

男2・女 そう。

男1 嘘。

男2 そういえば、キングは知らなかったよな。

女 あたしたち、付き合ってたのよ。

男1 そ…そうなんだ。

男2 でも、不思議なもんだぜ。ビバリー高校随一の遊び人がな…俺なんか先を越されるんだから…。多少、口説いたりとかしたのか？

女 口説かれたっけ？

男1 口説いてないよ。第一、私、遊んでました？

男2 遊んでたよ。

女 うん。

男1 あ…ああ、そうか。遊んでたかな…。

男2 俺はキングの軽快な生き方に憧れてたんだ…うん。

女 私には積極的だったよね。ボンちゃん。

男2 奥手の俺がな…。当時は純朴そのものだったのに。な？

女 うん。

男1 で、できあ…。

男2 はい？

男1 ふ…二人は、どこまで行ったわけ？

男2 大人の質問？

女 やだわ、キングだったら。

男1 ほ：ほら、聞きたいじゃないですか。参考までに。

男2 そりゃ、行くところまで行ったわな。

男2と女、スケベそうに目を見合わせて笑う。

男1 ……そうか。

女 ショックだった？

男1 え…いや。

男2 そんなワケないじゃん。こいつがどれほど遊んでいたか。

女 それもそうね。

男1 そんなに遊んでた？

男2・女 遊んでた。

男2 ちよつとばかり惚れてた女が、誰と寝たとかぐらいで傷つくようなタマじゃないよ。

女 いいわね、自由で。

男2 そうとも、こいつはアメリカのフリーダムそのものみたいな男だからな。

女 やめてよ、フリーダムに嫌なイメージが付くじゃない。

男2 いや、でも、これもフリーダムのひとつのカタチ…。

女 ダメよ！

男2 おいおい、ミルキー何をそんなに嫌がつてるんだ。

女 だつて…私のバンドの名前が…フリーダムなんだから。

男1・2 ダ…ダセえ。

男2 あ…あはは…そうか…(雰囲気を変えようと)あー、そうだよミルキー、覚えてるか
い？ちようにこの隣の宿舎に泊まったっけ。

女 そうだったわね。二人でヨットに乗って…少し沖合いに出て…。

男2 …ちよつとした冒険だったね。

女 また行かない？

男2 よし、明日行こう。

女 え？

男2 折角の同窓会だからね。明日はオフにしてあるんだ。

女 キャー、素敵。

男2 ミルキーの予定は大丈夫？

女 はじめから、空いてるわ。二流シンガーだもの。

男2 よし、今日は飲むか。

女 じゃあ、この上にラウンジがあるからそこにしない？

男2 ラウンジ？

女 うん。

男2 ラウンジもいけどさ、ここの最上階が会員制のコンドミニアムになってるっていうのは知ってる？

女 え、そうなの？

男2 どうせならそこで飲まないか？

女 え？

男2 実はもう、リザーブしてあるんだ。

女 うーん…でも、まずはラウンジで…。

男2 善は急げっていうじゃないか。そうだ、こんなゴミゴミした所で飲んでないでさ、さっさと上にあがろうよ。おいしいワインも用意してあるんだぜ。

男2、女の手を握って歩き出そうとする。女、手を振り払う。明らかに喜んでいる男1。

女 …。

男2 何だよ。

女 何よ！さっきからガツガツしちゃって！あたしの体だけが目当てなの？

男2 はあ？（呆れたように笑う）…取り乱さないでくれる？

女 …え？

男2 時間のロスだ。

女 時間…ロス？

男2 余裕ある振りしたってさ、俺らみたいな立場になれば分刻みで行動してる。四の五の

口説いてる暇なんかないんだよ。

女 …でも。

男2 まったく…ガキは疲れるな…。

女 なんですって！

「…」で、男1が「いやあ、喧嘩かい？」とかつて言って、二人の間に割って入る。

男1 オークイ、二人ともノーサイドだ。

男2、聞く耳持たず、女に背を向ける。そして、何故かギターを抱える。

女 あの人、変わったわ。

男1 大人になつたつて事じゃないか。

女 昔は、もつとのんびりした人だったの。そんな彼が、フリーダムな感じで私は好きだったのよ。彼は今、時間とお金に縛られてるわ。

男 フリーダムには、お金も必要だ。

女 私、正直お金には困ってないわ…親が金持ちだから。だけど、お金が人間を縛りつけるなら、私、そんなもの要らない！

男1 やれやれ、世間知らずのお嬢さんだ。

女 みんなそう言うわ。でも、フリーダムはお金を超えると思う。解ってくれる人なんて…いないか。

男1 居るぜ…ここに。(親指で自分を示す)

女 え…。

男1 俺なら…君のフリーダムを受け止めることができる。

女 キング…。

男1 それだけじゃないぜ。君のフリーダムを、世界中の人間に解らせてやることも出来る。どうということ…？

男1 俺がプロデュースするのさ、君のバンドを

女 プロデュース！？

男1 そうだ。新人バンドとして、ビバ・エンターテインメントから売り出す。

女 アメイジング！

男1 俺のパワーと君のフリーダムが合体して、スーパーフリーダムが誕生するんだ！

女 でも、大丈夫かしら、平均年齢39歳の新人バンドなんて。

男1 公称20歳にしよう。

女 見た目は誤魔化せないわ。

男1 CGを使えばいい。シミもシワもすぐ消せる。そう、年齢からの…。

女 フリーダム！…そうだわ。

男1 何？

女 レコード会社との契約が、まだ残っているの。

男1 ビバ・テレビをナメたらいけない。そんな会社、潰すことだってできる。

女 じゃあ！

男1 君は自由だ。契約からの…。

女 フリーダム！…そうだわ。

男1 言っでごらん。

女 ドラムの娘が、テレビ顔出しNGなの。

男1 どうしてだい？

女 彼女の家も名門一家だからよ。ロッカーなんてとんでもないって…。

男1 なんてフリーダムじゃないドラムなんだ！すぐ、新しいドラムを…。

女 やめて！

男1 何で。

女 ずっと、一緒にやって来た娘なの。もしダメなら、この話はなかったことに…。

男1 ミルキー…君にとつて、一番大事なものは何だ。

女 フリーダムよ。

男1 フリーダムにフリーダムじゃないメンバーを入れていたら、そんなバンドはフリーダムか？

女 (何か重大な事に気が付いたかのように)フリーダムじゃないわ！

男1 だろ。…切れ、容赦なく。そう、人間関係からの…。

女 フリーダム！…新しいドラムを。

男1 オーケー。(携帯をいじくりはじめる。「新しいドラムを…なに、ゴネてる？金を積みめ！」とか言う。)

女 ああ、素晴らしいわ！一夜にして、私はフリーダムを手に入れてしまったのよ！人間関係にも、お金にも縛られない究極の…みんな、あなたのお陰よ、キング！私、どうやってお礼をしたら…。

と、女の台詞が終わらないうちに、男2が歌を歌い始める。まあ、なんか「ミルキー、君こそフリーダム」的なやつを。

男1 じゃあ、頼んだぜ。金に糸目は付けないからな。ああ、今度ナットさんとこのミーティング。イおごってやるよ。ああ、じゃあな。

女 (男2の歌を聞いて)それ…もうしかして。

男1 いや…はは、ミルキー…ちよつと矛盾するようなんだが、今夜だけ俺に縛られてみないか?いや、できれば今後も継続的に縛られて欲しい。具体的な意味じゃないぜ。分かるににくいかな…よし、単調直入に言おう。

男2 学祭のとき、君のために作っていた曲…今日、完成したよ。俺は変っちゃったが、お前は昔のまままでいてくれ、ミルキー。

女 ボンちゃん…素敵イイイイイ!

男1 今夜、君を抱きたいイイイイ!

女、男2に向かって走り出す。男1、女に抱きつこうとしてこける。そのまま苦しみだす。

男1 うーん、どこだあ、ミルキー。君が見えない…。

女 キングさん…。キングさん…。

男1 …っは。

女 平気?

男1 …僕は?

男2 ひどいなされてたよ。

男1 …夢か。

女 何の夢見てたの？

男1 いや…アメリカ人になった夢を…。

女 あ、あたしも同じような夢見た。

男2 へえ…奇遇だなあ。僕も同じ夢見てたよ。

男1 みんな…そうだ…みんな出てきた。

男2 ひよつとして、みんな金持ちだった？

男1 ええ。

男2 ふーん…面白いね。僕のもやっぱり、みんな金持ちだったよ。

女 …死ぬ前にいい夢見たわ。金もあるし、金髪だしさ…今のあたしとは正反対。

男2 やつぱり、あれかな…死ぬ前に見る…お花畑が見えたとか、神様に会ったとか。

男1 ああ、やたら気持ちのいい夢を見るってやつでしょ。

男2 そうそう。

男1 ええ…でも、あれって昏睡状態とかそういう時でしょ…。

女 じゃあ、昏睡状態だったんじゃない？

男2 …。

女 よーし、今度はもつといい夢見てやる。

男1 僕は…もういいかな…。

女 えー、何で？

男1 結局、夢の中でも愛する女性を失って…。

女 …ああ。

男1 アメリカ人になつたって同じだ…この現実を生きてる限り。僕は…報われない仕組みになつてるんだ…。(泣き始める)

女 じゃあさ、いつそ非現実的な夢を見ようぜ。

男1 …非現実。

女 そうそう。アメリカ人とかじゃなくて、もっとブツ飛んだ…。

男2 ウルトラマンになりたいとか？

女 それ！そういうこと。

男1 …いきなりそう言われても。

女 駄目よ、考えたら。

男1 うーん。

女 パツと頭に思い浮かんだやつを。

男2 ヒットラーになりたい。

女 え？

男2 だめ？今、パツと頭に浮かんだんだけど。

女 いいけど…なんでなりたいの？そんな物騒なもんじ。

男2 僕と正反対だからさ。ヤル気のかたまりで。社会をああしてやろうとか、この人種をこ
うしてやろうとか…。ありえないんだよ、僕にとって。ウルトラマン以上にありえない。

女 そうなんだ…キングさんは？

男1 クマのプーさん。

女 へ？

男1 いいじゃないですか、ひとつにかける人生。僕もそうありたかった。

女 プーってそんな話だっけ？

男1 ハチミツのためなら、だます、奪う、他人ひとに迷惑をかける。そして悪びれない。こういう

女 凶太い人間になりたかった。
なるほどね。

男1 ミルキーさんは、何になりたいんですか？

女 うーん…プリキユアかな。

男2 …あれ、いっぱいいるじゃん。

女 一人でやるよ、全部。

男1・2 …。

女 プリキユアになりたい。

男1・2 …いいよ。

男2、あの変な歌を歌う。三人、次第に唱和、立ち上がる。ヒットラーとプーとプリキユアをやつて下さい。全員、その場で倒れて苦しみ出す。

男2 やつぱり、成立しませんでしたね。

女 何、今の…夢？

男1 おえー！（嘔吐）

女 死ぬ直前の夢は気持ち良いんじゃないの？

男2 …おなか空いてるせいかな。

女 ……あ。

男2 おなか減らない？

男1 ああ、ええ…：そういえば。

男2 これじゃ死んでも死ねないよね。

女 肉とか焼こうよ。

男1 あるんですか？

男2 ないよそんなもん。

女 なあんだ。せつかく七輪あるのにさ。

男2 肉焼くために買ったわけじゃないからね。

女 何か食べ物ないの？

男2 全部捨てたよ。

女 ええ…。

男2 これから自殺しようつてのに…：食べ物なんかあつても腐らせちやうからね。

女 腐らせちやつてもいいじゃん。どうせ、死ぬんだから。

男1 やめましょうよ。

女 え。

男1 イライラしてもお腹減るだけですから。

女 …うん。

男2 しかし、嫌だな…このまま空き腹抱えて死ぬなんて。

男1 …そうですね。

男2 まあ…とりあえず寝よう。

全員、横になる。

女 あー…お肉食べたい。

男1・2 …。

女 半生に焼いたお肉食べたい。

男1・2 …。

女 半生に焼いて、甘辛いタレをかけたお肉食べたい。

男1・2 …。

女 キムチをつけて。

男1・2 …。

女 半生に焼いて、甘辛く味付けした…。

男2 あああああああ！

女 どうしたの。

男2 食べたくなっちゃった！お肉、食べたくなっちゃった！

女 …お肉には持てるんだ、執着。

男2 …。

男1 どうします？買ってきますか？

男2 だめだよ。そうしたらまた最初からやり直しだよ。

男1 …死ぬのも難しいですね。

男2 …うん。

男1 早く寝ちゃいましょう。

三人、再び横になる。

女 ほんとはさ…死にたくないのかな。

男1 え？

女 体はさ、食べたがってるじゃん。お肉。

男2 うん。

女 まあ、いいわ、あたしはどうせ死んじゃうんだから。…残ったやつらが、あたしの保険金で肉でも何でも食べたらいいのよ。

男1 ミルキーさんは。

女 うん？

男1 家族のために死んでいくんですね

女 そんな、偉いもんじゃないよ。あたしが勝手に死ぬの…家族にうんざりして。

男1 …。

女 バカバカしいね。

男1 …いや。

女 家族で焼き肉か…。

男2 …？

女 一回くらい行ってみたかったわね。

男2 ないんだ。

女 あたしが生まれてから、家族、そろったことないのよ。

男2 ミルキーさんはさあ…原始時代とかの方が、まだ幸せかもね。

女 はあ？

男2 だって、家族がさあ、まとまって…食ってるじゃん、ムカシ人間とか。

男1 あー、マンモスの肉？

男2 そうそう、骨付きのこんな大きなやつ。

女 ああ、ウィンピースでルフィが食べてるみたいなの？

男2 みたいなの。

女 それ！食べたい。

男1 いいですね、みんなでワイワイ、ビールでも飲みながら。

女 あはは。

男2 ねえだろ、原始時代、ビール。

女 でも合いそう、マンモスにビール。

男1 ああ…やめてよ、食べたくなくなっちゃうよ。

三人 肉…肉…肉…肉…肉…肉…。

三人、そのまま拍子をとって起き上がる。

舞台は原始時代に。男2と女、何かをムシヤムシヤ食べている。

男2 マンゴー、グレープフルーツ。

女 キウイ、パイヤ。

男2 マンゴー。

女 桃、栗。

男2 マンゴー。

女 マンゴー。

男2 ……マンゴー。

女 マンゴー！

男2 おなかいっぱい。

女 満足。

二人、笑う。するとそこに、巨大な肉を引きずった男1が登場。(キン肉マンのテーマかなんかを歌って出てきてもいいかもね)

男1 うはは、ボンジュール。

男1 よそ者！

女 よそ者！

男1 ボンジュール！

女 知らない言葉！

男2 見知らぬ土地の言葉！

女 よそ者出て行く！

男1 そんなこと言わない。ミーは取引したいだけ。

男2 取引？

男1 ユー達の持つてる豊富なフルーツと、ミー達の飼っている家畜の肉を交換したいのデス！

男2 肉？

女 肉って何だ？

男1 とつても美味しいモノなのデス！

男2 肉…。

女 うまい…。

男1 とにかく一口、トライしてみるべきデス。

男2 お前、食え。

女 お前こそ、食え。

男1 レッツ、トライ！

男2と女、おつかかなびつくり肉を口に入れる。

男2 うまい！

女 うまい！

男1 でしょう。

男2 これ、くれ。

女 うんうん。

男1 じゃあ、フルーツをプリーズ。

男2 あげる。ほら、マンゴー。

女 柿、目にいいブルーベリー。

男2 ゆず。

女 抗酸化作用のあるアボガド。

男2 ノニジュース。

女 ミックスナッツ。

男2 マンゴー。

女 マンゴー。

男2 マンゴー。

女 ドライマンゴー。

男1 ちよつとマンゴー比率が高いような気がします、良しとしましょウ。

女 ちよつとした乾きモノも入れておいた。

男1 メルシー、ボーケー。では、また定期的にやってきます。

男2 大歓迎。

女 また来て。

男1 アデュー。

男1、舞台の隅に退却。

男2 肉。(食べる)

女 肉。(食べる)

男2・女 おいしい。

男2 豊富な肉。

女 肉。

男2・女 うまい。

男2 …もうない。

女 うん…ない。

男2 仕方ない。フルーツ食べる。

女 うん。

二人、フルーツをむさぼる。

男2 …。

女 なんかねえ…ことう。

男2 おいしいんだけどねえ。

女 モノ足りないつつうの？

男2 満足できない。

女 できない。

男2 はやく、あのフランス人来ないかな。

女 でも、最近、あいつ来なくなつた。

男2 うん…どうしたんだろう。

男1 ひい…ひい…。(体を引きずるようにして登場)

女 あ！フランス人！

男2 肉！

男1 オー！フルーツ族の皆さん！助けて下さい！

男2 どうした！

男1 我がフランス族の村に、おいしい肉を求めてほかの部族が攻めてきたのです！

男2 なに！

男1 ミーは命からがら逃げてきまシタ。

女 じゃあ、肉は？

男1 そんなもん、持って来てるワケないでシヨウ。

男2 なんだ…。

女　じゃあ、用ない。

男2　帰れ。

男1　いいんデスか…そんなこと言つて。

女　…？

男1　攻めてきたアングロ・サクソン族はとつても肉食です。彼らに家畜を取られたら、はつきり言つてあなた方に回つてくるお肉はゼロデス。

男2　肉…食えなくなるのか。

女　やだ。

男1　でしょう…じゃあ、我がフランス族と一緒に戦つて下サイ。

男2　え…でも、オレけんか弱い。

女　ダメ！お肉食べたい！戦う！

男2　ズルい。お前戦わないのに。

女　お前戦わないなら、ワタシお前の子供生んであげない。夜の生活もナシ。

男2　…仕方ない。戦う。

男1　それこそ真のオトコデス！

男2　ただし、勝つたら肉くれ。

男1 当然です。最高級のマツザカ牛をあげます！

男2 よし、やる気出た！

女 ガンバレ！

男1 うん…あ、アレは！

男2 あいつらか！

男1 そうデス！凶暴極まりないアングロ・サクソン族デス！

男2 よーし、かかれ！

男1・2、喚声を挙げながら、壁に向かって襲いかかる。そして、ヘトヘトになって戻ってくる。

女 どうだった？

男2 ボロ負け…。

男1 ああ…やっぱり肉食ってるやつらは強いわ…。

女 じゃあ、肉は？

男1 あるわけないでしょう、そんなモノ。

女 えー！（へつたりと座りこむ）ひもじい…。

男2 仕方ないから、フルーツ食べる。

男1 ミーにも下サーイ。

三人 頂きまーす。

男2 ウマイ！

男1 戦のあとの、渴いた喉にシミ渡りマース！

女 そういえば、この間、ダメになったブドウからこれ出来た。飲む。

男2 何だこれ。

女 知らない。でも、飲むとポカポカする。

男1 大丈夫デスか？

三人、飲む。

男2 あれ…なんか、楽しい。

男1 戦に疲れた、男の心を癒しマース！

女 ね。

三人、飲み食いして歌う(「肉なんか要らない」のテーマ)。ベロベロに酔う。

女 みんなで食べて飲む。楽しい。

男2 うん。

女 こんなに楽しいなら、肉いららない。

男1 この液体、ヤバイデース。我がフランス族の村に持ち帰って作りマース！

男2 ロマネコンティできたなら、ちようだいね。

男2 ウイー、ウィー。

女、突然、男1の足を噛む。男1、悲鳴を上げる。

男1 なにスルンデスカ！

女 こいつ、食う。

男1 え！

女 よく考えたら、こいつも肉。

男2 おお、グッドアイディア。

男1 今、肉いらないつて…。

女 一杯やったら、モノ足りなくなつた。

男2 肉！

男1 や、やめナサイ！野蛮デス！

女 大人しくする。

男2 肉！

男2、男1を押さえつける。女、男1のふくらはぎに噛み付く。

女 うま…うまい。

男1 ギャー！

男2 キングさん、大丈夫か！ちよ…やめろ！ミルキーさん！

女 …は！（男1のふくらはぎを放す）

男1 痛う…。

女 肉…。

男2 肉？

女 今、ここに大きな肉が…。

男2 寝ぼけてんのか？

男1 勘弁してくださいよ。思いつきり噛んだでしょ。

女 うん、固くてマズい肉だった。

男2 こりやダメだ。人間が肉に見えるんじや。

男1 相当、腹減ってますね。

女 あ、キングさん。

男1 おはようございます。目は覚めましたか。

女 肉は？

男1 ここです。(ふくらはぎを指差す)

女 え！ウソ！どうしたの？痛そう。

男1 あんたに食われそうになったんだよ！

男2 …幻覚かもな。

女 幻覚？

男2 うん。窒息状態に陥ると見ることもあるらしいよ。

女 あたし窒息してるの？

男2 うーん、わかんないけど、だいぶ火もまわったみたいだしね。クソ暑いし。

女 おなか減ってるし。

男1 変な夢見ても不思議じゃありませんよ。

男2 だね。

女 あー、でもやっぱ最初に見た夢が良かったなあ。

男1 ああ、アメリカン？

女 そう。暑くもなく、寒くもなく、なによりフリーダム！

男2 食べ物にも不自由しないし。

女 最後はあの夢で死なね？

男1 そんなに都合良く、見たい夢が見られるといいですけどね。

女 枕の下にさあ、見たい夢を書いたメモを入れるといいらしいよ。

男2 やつてみる？

女 うん。

男2 書くものある？

男1 ああ、黒しかないですけど。(胸ポケットを探る仕草)

男2 上等上等。

女 メモは？

男2 五線譜でいい？

女 上等上等。

全員にメモが行き渡る。ペンは回す仕草。

女 枕は？

男1 ないですよ。

男2 しょうがないじゃん。直接頭の下に敷けばいいよ。

女 うーん、気分出ないなあ。

男1 まあ、いいじゃないですか。

男2 とにかく試してみよう。

女 …はあい。

三人、頭の下にメモを敷いて横になる。

女　ねえ。あのさ。

男2　うん？

女　なんて書いたの？

男2　秘密。

女　やっぱ、アメリカ人？

男2　違うよ。

女　協調性ねえな、キングさんは？

男1　死に別れた彼女とね…また、会えますように…みたいな。

女　ふーん、いいわね、生臭くなくて。

男2　今度はみんな別々の夢にしようよ。

男1　そうですね。

女　…おやすみ。

男1・2　おやすみい。

しばしの静寂。と、男1と男2、うなされはじめる。すると、「グッモーニン」と言いながら、女が登場する。

男1と2、頭を抱えダルそうに呻く。

男2 …おはよう。

男1 …早いね。

女 うん、先にシャワー浴びちゃった。

男1 あれ…昨日は…。

女 やだ…覚えてないの？

男1 あ…うん。

女 結局、ここで飲むことになったんじゃない。

男1 ああ…そうだったけ。

女 でも、さすが最上階だわ。イイ眺め！ね。(男2に)。

男2 ああ…うん。

女 さて、今日はヨットで沖まで行くんだっけ？

男1・2 ええ。

女 何、イヤなの？

男2 いや、飲みすぎで気持ち悪いんだよ。

女 ええ。

男1 もう、沖にいるみたいだもん。

男1、少し口を押さえて吐きそうになる。

男2 おい、大丈夫か。

男1 ノープロブレム。

女 ヨットは？

男2 無理だよ。

男1 向かい酒…。

男2 ウイスキーだよな。

男1 ああ、しかやらねえ。

男2 ビールくれ。

男1 おう。(放つてよこす)

女 ヨットは？

男2 無理だって言ってるんだろ。それよりカーテン引いて。まぶしい。

女 えー、せつかく絶景なのに。

男2 仕方ねえだろ。キング気持ちわりいんだから。

女 飲みすぎるのが悪いんだよ。

男2 男には飲みたい夜もあるんだよ。な。

男1 …はは。

女 あーあ、天下のプロデューサーも、二日酔いからはフリーダムになれないのね。

男1 …聞き捨てならないな。

男2 やめろよ、ミルクィー。ヨットなんかいつでも…。

女 私はフリーダムになったのよ。その翌日の朝から、早くもノーフリーダムだなんて…耐えられないわ。

男1 オーケー、ミルクィー、流石は俺の見込んだタレントだ。

女 じゃあ、行くのね？ヨット。

男2 ええ…。

男1 賭けをしよう。

女 賭け？

男1 オープン・ザ・カーテン！

女 (あ…はい。(カーテンを開く))

男1 いいか、このホテルの下は、すぐストリートだ。明け方だから、まだ誰もいない。

女 ええ。

男1 だが、もうすぐ健康のためにジョギングする人、すなわちジョガーがこの下を通る。

女 アー、ハシ。

男1 そいつが男だったら、俺たちちやここで昼までお寝んねだ。だが、女なら…。

女 ヨットね。

男1 イエス。

男2 クレイジーだ。

男1 はは、ボンちゃんは賭けが嫌いだったよな。

男2 ああ、アンチヨビと賭け事は大の苦手でね。

男1 だから、ピザ屋にならなかったのか？

男2 それもあるな。

男二人、笑う。

女 来たわよ。

三人、窓際に寄る。

男1 どうだ、男か女か。

女 待つて、まだ分らない。

男1 ピンクのパーカー、長い髪。

女 女だ！（大喜び）

男1 女だ！（天を仰ぐ）

女 ヨット！ヨット！

男1 （即、受話器を取り）フロントか…酔い止め…。

男2 待つて。

女と男1、窓際に寄る。

男1 ピンクのパーカー、長い髪。

男2 髭の剃りあと、広い肩幅。

女 スネ毛…。

三人 真ん中の人だ！

男1 アー、マイガッ！

女 この場合、どうなるの？

男1 男だろ。

女 中身は女だわ。

三人 …。

男1 ノーカンだ。

女 そうね。

男1 次で勝負。

女 異議なし。

男2 いいぜ。

男1・女え？

男2 行こうぜ、ヨット。

女 ホント!?!?

男2 仕方ねえ、行こうと言ったのは俺だ。…キングはどうする？

男1 お前らだけ行って、俺だけ待つてろって言うのか。

男2 決まりだな。

三人、笑う。

女 何か、前にも同じようなことあったわね。

男2 あーあれか。

女と男2、目を見合わせて笑う。

男1 やめてくれないか、そういうの。

男2 へ？

男1 キズつくだろ。(笑う)

男2 ああ…そっか、キングにとっちゃ、昨日は生涯初の失恋だったな。

男1 二人だけの秘密か。…はは、見せつけるねえ。

男2 別に秘密じゃ…。

女 マドンナよ。

男1 マドンナ？

女 行けなかったのよ、ボンちゃん、マドンナのコンサート。あたしにフラれたショックで。

男1 フラれた？だつて…。

女 そう、一回、フラれてるの。

男1 へえ、すんなり付き合ったワケじゃないんだな。

男2 行けなかったんじゃないよ。

女 え？

男2 行かなかったんだ、コンサート。

男1 ほう。

男2と女、並んで立つ。

男2・女二十二年前。

男2 ブオオオオ…キキツ…ガチャガチャ(ギアを入れ替える)。

女 ちよつと、あんまり飛ばさないでよ。

男2 これが飛ばさずにいられるか。

女 そんなにシヨックだったの？あたしにフラれて。

男2 ああ、自分でも予想外に。

女 コンサート、どうする？

男2 行く気になれない。

女 もつたいないなあ、最前列。

男2 君だけ行くかい？

女 イヤよ。それより、おなか減らない？

男2 バーガー屋にでも入るか。

女 ええ。

男2 …。

女 …。

男2 賭けをしないか？

女 賭け？

男2 バーガーのバンズに乗ってるゴマの数が偶数なら、君は俺と付き合う。

女 奇数なら？

男2 君の目の前から消えるよ。

女 毎日クラスで会うけどね。

男2 まあな。

女 そんな賭け、お断りだと言ったら？

男2 このままバーガー屋に突っ込んで、バーガーまみれになって死ぬ。

女 そんな死に方、イヤだからOKよ。

男1 強引な展開だな。で、結果はどうだったんだ？

男2 ……それが。(笑)

女 乗ってなかったのよ、ゴマが…バンズに。

三人、笑う。

男2 オーライ、ノーカンだ…次の店に。

女、男2の手をつかむ。

女 いいわ、付き合っただけ。
男1 えー！なんで？
女 可愛かったのよ、バーガーが出て来た時のうろたえた顔が。
男2 うろたえてたか？
女 ええ…で、そのままエアロスミスのコンサートに行ったの。
男1 え、マドンナは？
女 さあ…でも、エアロスミスだったわよね。
男2 二人きりになりたかったんだ。
女 え？あたしとボンちゃんだけじゃなかったの？
男2 あと、もう一人いたんだ。誰だったかな…俺とミルクィと。
男1 俺な。
男2 あ…あれ。キングだったっけ。
女 三人で行く予定だったの？
男2 気…気まずかったんだ。二人つきりっていうのはさ。
男1 俺も気まずかったぞ。好きでもないマドンナのコンサートを最前列で。

男2 …。
男1 …女も連れず。
男2 …。
男1 …しようがないから踊ったぞ…最前列で。
男2 …ごめん。
男1 恨んだぞ。あんなイイ席取りやがって。
男1 あの日、風邪引いたつて…言つてたよな。信じたぞ。
男2 …。
男2 だから…ごめん。
男1 ゴメンで済むか！
女 帰ればよかつたのよ。
男1 え？
女 そんなにイヤなら…帰ればよかつたのよ。
男1 …それは、君が…。
女 うん？
男1 …来るかもしれないと…思つていたから。

女 …ああ。

男2 何だ…。

男1 あ？

男2 結局、お前も女が目当てだったんじゃないか。

男1 何！俺はお前とミルクィの間を取り持ってやろうとして…。

男2 あぶねえ、あぶねえ…危うく横から女、さらわれるところだったぜ。

男1 ダチの女にまで手え出すかよ。

男2・女 出していた。

男1 そ、そうだった。

男2 俺は、お前を眠れる獅子と呼んで恐れていた。ビバ高校の女を片っ端から食ってるお前に内心ヒヤヒヤだったんだ。

男1 …。

男2 何でミルクィにだけは手を出さなかったんだろう？ずっと不思議だった。

男1 それは…。

男2 何のことはない。お前はミルクィに手を出そうとしていたんだ。予想外に俺の行動が早かったんでタイミングを失っただけだ。

男1 ちが…。

男2 何が違うんだ、このスケベ野郎！

男1 テメエ、いい加減にしろ！

男2 何だ、やんのか！

男1 上等だ！

女 ちよつと、やめなさいよ二十年も前の話で。

男2 女は黙つてろ！

男1 そうだ！男にはやらなきゃならないときがあるんだ。

男2 …覚悟はいいか。

男1 こつちのセリフだぜ。

男1・2 …どりゃあ！

男1・2、お互いに殴りかかる。しかし、非常に無様な戦いぶり。

男1 はあ、はあ、はあ…。

男2 はあ、はあ、はあ…。

男1 へ…キク…梵ちゃんのパンチ、重すぎるんだよ。
男2 キングのローキックも効いたぜ。
男1・2 あははははは！
女 ひよつとして…二人ともケンカ弱いのか？
男1・2 うん。
女 なんだ…つまんない。
男2 …え？
女 あたし、帰るわ。
男二人 え！？
男2 ヨットどうすんの？
女 二人で行きなさいよ。
男1 気持ち悪いだろ、男二人で。
女 じゃあ、やめたらいいじゃない。
男2 名刺だ。このナンバーに連絡を。
女 要らないわ。
男2 チャンスなんだぞ、フリーダムになれる。

女 二十年も前の恋愛に縛られるなんて、冗談じゃないわ。しかも、その調子じゃ永遠に決着なんて着きそうもないし。

男二人 …。

女 帰るわ。二人とも、もう少し自由になったらまた会いましょう。(背を向ける)

男1 待つて。(走つて来て、今、追いついたというふう)

女 …。(振り返る)

男1 なるから、自由に。(息を切らせて)

女 追っかけて来ちやったの？

男1 うん。

女 マジメねえ。

男1 …なるから。

女 なつてないじゃない、自由に。必死じゃない。

男1と女、笑う。

女 もう、いつかい終わらせたんでしょ？

男1 うん。

女 邪魔になつたら、また殺すんじゃないの？

男1 そんなことしないよ。

女 ホントに？

男1 だって、僕死ぬんだから。

女 …。

男1 一緒に死んでほしいんだ。死ねば…自由だろ？

女 そうね。

男1 女と死にたい。

女 また死ぬの？あかし。

男1 ダメ？

女 いいわよ。

男1 やった！

女 でもね…できれば。

男1 ？

女 そんな風に、自由になつて欲しくないわ。

男1 ……どうしたらいいのさ。

女 自由から自由になって。自由に縛られないで。

男1 ……。

女 ただ、自由になって。

男1 ただ…自由に？

女、うなづく。

男1 なにそれ。

男1、気を失って倒れる。女と男2、「自由からの自由」をテーマに一曲、自由じゃない男1に聴かせてあげて下さい。

男2、静かにギターを弾く。男1、ゆっくりと目を覚ます。

女 おはよう。

男2 ああ、起こしちゃった？

男1 あ、いや…。

女 ごめんね、いい夢見てたのに。

男1 え？

女 にやにやしてたからさ…。

男2 会えたんだ、彼女と。

男1 …はい。

女 このー、自分だけいい思いしちゃって。

男2 …しかし。

女 うん？

男2 死なないね。

女 ちよつと目貼り甘いのかね、やつぱり。

男2 チェックしよつか、キングさん見習って。

男2と女、目貼りのチェックを始める。

男1 やめようかな…。

女 は？

男1 死ぬの…やめようかな。

顔を合わせる男2と女。

男2 今やめたら、全部やり直したよ。目貼りやつて、火を起こして…。

女 えー、やだ。

男1 とりあえず…。

男2 …。

男1 …帰ります。

慌てる男2と女。

男2 待つてよ。

男1 はい。

男2 なに…どうしたの？急に。

男1 彼女に…言われたんですよ、自由になれって。

女 言われたって…？

男2 夢の中で？

男1 はい。

男2と女、やや呆れた顔をする。

男1 死ねば…自由になると思っていたんです、彼女の死から…残された無意味な世界から。

でも、そんな風に自由になって欲しくないって…。

女 彼女が？

男1 はい。

女 うーん…帰んの？

男1 ……迷惑でしょうが。

女 ……しよーがないんじゃない？(男2を見る)

男2 ならないよ。

女 は？

男2 自由になんか。

男1 …なりませんか。

男2 ならないよ。第一、出て行って…どうするの？

男1 わかりません。

男2 じゃ、ならないよ。僕はこう見えても、あんたよりずっと長いこと、無意味で無価値な

世界で生きてきたんだ。キングさんは…絶対に自由になんかならない。

女 なんで分かるのよ。

男2 見つかりそうかい？何か彼女のほかに、意味のありそうなものが。

男1 …。

男2 ほらね。…このまま生き延びてごらん、キングさんは何を見ても、何を聞いても心を動

かさなくなる。…人間は「肉」に、途端^{とたん}、世界は「モノ」に…無意味に…無感情に。

女 いいじゃない、楽で。何があったって、悲しくも辛くもないんだから。

男2　でも、身体は襲^{からだ}つて来る。生きてるなら栄養摂^とれつて、生きるために無意味なコミュニケーションとれつて…食えつて、話せつて、寝ろつて、排泄しろつて…繰り返す、無感情に。
えんえん…死ぬまで。疲れる。でも、逃げられない。

男1、その場にうずくまつてしまう。

男2　僕と同じだ。キングさんは、死ななきや自由になれない。

女　ちよつと…。

男2　なに…。

女　いいんじゃない？帰るつて人まで巻き添えにしなくても。

男2　ダメなんだよ…三人一緒じゃないと。

女　…？

男2　ダメなんだ。

女　…。

男2　さあ…次はどんな夢見ようか？

女 ええ、まだやんの？

男2 やるよ。(紙を配る)

女 もう、眠くないよ。

男2 眠くなるって、もうちよとしたら。

女 ホントに？

男2 そういう死に方なんだから…ほら…キングさんも。

男1 …。(虚ろな目で紙を受け取り、ぼんやりと書きつける)

女 あー、もうネタ切れ。

男2 そうね…。(いっぱい書く)

女 なんか、ムチャクチャ書いてんじやん。

男2 途中で目え覚めなくなるかもしれないからさ…書き溜め？

女 まーた、混ざって変な夢になるかもよ。キングさんは？(紙を奪う)…クマのプーさん。

男1 もう…人間やだ。

女 なるほどね。あー、あたしも人間とかやだ。…そういうの無いところ行きたい。さっきの

死んだ人が行くお花畑みたいなさ。

男2 あー…。

女 アルプス行きたい。ハイジになる。
男2 ハイジ、人間だけどね。
女 なんか、人間離れた生活してんじゃん、獣っぽい。
男2 あー、じゃあ僕、ヤギ。
女 リアル獣だ。
男2 ヤギ飼ってたよね？
女 飼ってた飼ってた、デカイ犬と。
男1 あと、小鳥ね。
女 キングさん。
男1 なに。
女 帰んなくていいの？
男1 うーん、もう分かんない。分かんなくなつた。
女 そう。
男2 悩んでるうちに、死ぬよ。
女 帰りがかったら、帰っていいからね。
男2 えー。

女　また、やりなおすからさ。

男1　…どうも。

女　ハイジの歌ってどんなだっけ？

三人、誰ともなくハイジのテーマを歌い始める。うずくまっていた男1、立ち上がる。

男1　ハーラホーレハヒフレ、ハヒフレホー！やあ、私はアルプスのグリズリー、プーさんだ。皆

は私のことを恐がって近付いて来ないが、実は私はとっても優しい。好物はハチミツなんだよ。私の父は、人間の友達になろうとして近付いて行ったところを、鉄砲で撃たれて死んでしまった。本来なら怨むところだが、私は怨まない。徳の高いクマさんを目指しているのだ。

ハチミツはなせ〜♪と歌いながらスキップして舞台を一周。

男1　実はお肉もちよつとだけ好きなのだ。でも、人間に恐がられないためにも、我慢しなく

ちゃね。あ…そんな話をしているうちにも、人間一人とヤギ一匹が近付いて来た！

男1、舞台の端へ。女と男2、ハイジのテーマを歌いながら舞台中央へ。

女 あー、今日も放牧たりいな…。

男2 そーだね。

女 てゆーかさ、羊つてあんたの仲間だよね。

男2 広い意味では。

女 じゃあ、あんたやってよ、羊追い。

男2 いたろ、羊飼い。何で、あいつがやらないんだよ。

女 ペーターは、おじーさんの介護で忙しいのよ。

男2 てか、お前が介護すりゃいいんじゃないの？

女 あたしじゃ、嫌だつて。

男1 ああ。

女 うん。

男1 これから、誰が教えてくれるんだろうな。

女 何を。

男2 色々だよ。

男2、ギターを弾き始める。

『 羊どもはなぜ、言うことを聞かないの？

この山にはなぜ、他の仕事がないの？

教えて、おじいさん。

教えて、おじいさん。

教えてー…』

男1 教えてあげるよ。

男2・女ギヤー！

男1 教えてあげるよ。

男2 クマ…クマ…。

女 食べないで！

男1 食べないよ…それより、何か困っているんですよ。

女 へ？

男1 私で分かることなら、教えてあげるよ。

女 ほ…ほんとに？

男2 ハ…ハイジ、だまされちゃダメだ…畏だ！

男1 畏じゃないよ。

女 じゃ…じゃあ…。

男1 ハイジ！

女 羊たちが、言うことを聞かなくて困っているのよ。

男1 ほうほう…要するに、あの羊さん達をまとめればいいのね。

女 そういうこと。

男1 お安いご用さ。ぬがー！

男2 ひっ！

男1 その羊ども、二列縦隊に整列！親羊は子羊を確保！もたもたするな！三番目のお

前！パーマ激しいやつ！列を乱すな！食っちゃまうぞお！

女 ひゃあ！すごい、すごい！

男2 あつという間に集まった！

男1 これでもいいかな。

女 いい！

男1 えへ。

女 お礼、何がいい？エサならあるよ。(男2を押し出す)

男2 やめろよ。

男1 じゃあ、友達になって下さい。

男2 友達？

女 そんなんでいいの？

男1 はい。

男2 待てよ。

女 何？

男2 いいのか、熊だぞ？食われるかもしれないんだぞ。

女 大丈夫よ、優しそうじゃない。それに、力もありそうだし。何かと助かるわ。

男2 うーん。

女 よろしく、クマさん。(手を差し出す)

男1 プーさんって呼んで下さい。(手を取る)

男2 俺、ヤギのユキちゃん。(手を重ねる)

女 肉球だあ☆

女、肉球をなでなで。くすぐったがる男1。そのまま歌に突入。

『 このクマはなぜ、こんなにも優しいの。

肉食をやめ…自己啓発したからさ。

こいつは便利なヤツがやって来た。

明日から、仕事を手伝います。』

男1 (薪を運んでいる)ひい、ひい、ひい…ふう(薪を下ろす)。(ヨーデル風に繰り返す)

二人、必死に働く男1を尻目に漫画を読んでいる。(笑ったり、○巻貸して…とか言ってる)

男1 薪、運び終わったよ。

女 お疲れえ。

男1　じゃ、私も○○(漫画の名前)を…。

女　あ、じゃあ、お風呂わかしといて。

男1　え…。

女　なに、文句あんの？

男1　いや…でも、こういうパワーのいらぬ仕事はヤギさんでも…。

男2　風呂わかすのは、新入りの仕事…。

男1　…。

男2　はい、やる。

男2と女、ハイジのテーマを歌い始める。

男1　…わかつたよ。

男1、風呂をわかし始める。

男2　あー、なんか最近楽だよね。

女 プーさんのお陰よ。

男2 でもさ、あいつ、バカだよな。

女 うん。

男1 熱めがいいですかあ。ぬるめがいいですかあ。

女 長生きしたいから、ぬるめ。

男1 ハイ。

男2 でもさあ…。

女 うん。

男2 ちよつと、気をつけた方がいいんじゃない？

女 何が。

男2 あいつだつて熊だからさあ。

女 …。

男1 ふいー、疲れたあ。

女 お疲れえ、どう…この生活は。

男1 いやあ、森にいた時とは比べものにならない充実感です。

女 そう、良かった。

男1 あー、おなか減った。(男1をじつと見る)

女 プ…プーさん。

男1 え。

女 よだれ…。

男1 え…あー、熊つてね、あこの構造上、どうしてもよだれが垂れやすいのね。ほら、とがってるでしょ。

女 あ…うん…あ、そうだプーさん、ハチミツあるよ。

男1 ハチミツ！

男2 あー、でもあれ、ダメだぜ。

男1 え！

男2 アルプスブランドの純粋ハチミツにするんだって、他人に触らせなかったじゃん、じーさん。

男1 そーなんですか。(しよんぼり)

女 平気だべ、寝たきりだし。バレやしないよ。

男2 まあ、ハイジがそう言うなら。

男1 大丈夫なんですか？

女 平気平気。

女、笑う。三人、一カ所に集まる。

男2 すげえ蜂だな。

女 これ、近付けないよね。

男2 アミ持つてこようぜ、アミ。

女 あー、かぶるやつ？

男1 大丈夫、私がやりますよ。ぬがー！

男2 すげえ！

女 ふさふさの体毛が、蜂を寄せつけないわ！それに見て、巣箱を扱う繊細な指の動き！

男2 ちくしょう！ひづめの俺には真似できねえ芸当だ！

二人、男1に声援を送る。手を振る男1。

男2 あれ？じーさんじゃないか。

女 え…あ、ほんとだ。

男2 じーさんが…じーさんが立った！

女 ダメだよ、立ったら。ころぶよ。

男1、おじーさんに気付いて手を振る。

男2 ん…じーさん、何か構えてるぞ。

男2・女 鉄砲だ！

プーさん、驚く。

男2 違うんだよ、じーさん、プーさんはハチミツ泥棒じゃ…。

女 きゃー、助けてー！

男2 え…。

女 ハチミツ泥棒に殺されるう！

男2 何言ってるんだよ、ハイジ。

女　このまま真相がバレたら、あたしらじーさんにどやされるんだよ。

男2　あ、そうか。

男2・女ギヤァー！ハチミツ泥棒だ！助けて！

男2と女、おじーさんがいると思われる男1の対面に集まる。

男1　え、えー！

男2　撃て！じいさん、今なら殺れる！

男1　待つて…待つて下さい。私は…。

女　お願い、プーさん、死んでえ！

男1　そんな…は！あなたは！おじーさん、あなたは私の父を撃ち殺した人ではありませんか！？

男2　え！？そんな過去が！

男1　なんとという皮肉！

男2　やばいよ、じーさん、はやく撃つてくれ！あいつ、じーさんに怨みがあるんだよ！

男1　そんな…私は徳の高いクマを目指して…怨みなんて。

女　じゃあ、死んでくれるわね。

男1　え…。

女　私達のために。

男2と女、「死ね」コール。

男1　分かりました。

男2と女、拍手喝采。男1、座禅を組む。

男1　さあ…早く…。

女と男1、「やったね、今晩はクマ鍋だ」とか「久しぶりに肉が食える」とか、「親父の熊を仕とめた時も、教えてくれりやなあ…」とか言う。「肉」コール。

男1　貴様ら…。

男2 ひっ…。

男1、ぬがー！と言って襲いかかる。

男2・女ギャー！

男2 だから、俺は言ったんだ…熊なんかと友達にならない方がいいって…。

男1 …。(とどめをさす。肉を口に運ぶ。)

女 ひ…ひー！やめて、殺さないで！

男1 …。

女 ハチミツあげるから…ここにあるやつ、全部あげるから。

男1 …俺が本当に欲しいのはなあ…(とどめをさす。そして、肉をえぐる)…これだ。(口に運ぶ)…カルビ・ロース・牛タン♪×2(教えておじいさん風に歌う。女のその部位をつまんで食う。女、ピクピク反応)…おいしいよお…さびしいよお…こんなところ、来なきやよかったです…。

男1、うづくまる。

男2 キング、キング…。

男1 え…あ…？

男2 大丈夫か？

女 船酔い？

男1 わ、私は…。

男2 いったん戻ろうか。

女 えー、せつかく沖まで来たのに。

男2 仕方ないだろ。キング具合が悪いんだから。

男1 …梵ちゃん…あれ？

男2 やっぱ無理だったんだよ。今朝、あんな二日酔いでさ、ヨットなんて。

女 暴れたらすつきりしたって言ってたじゃない。

男1 あー…大丈夫だよ。ちよつと悪い夢見ただけだから。

男2 …無理すんな。

女 暑いものね。こんなところで寝たら、悪い夢も見るわ。

男2 キヤビンに入ってたほうが…。

男1 表のほうが…気分がいい。
男2 …そうか。
女 ちよつと波が高いわね。
男2 普通じゃない？
女 そう？昔来た時はこんなに…。
男2 ああ、あの時はベタ風だったからな。
女 そうなんだ。
男2 よし、メシ食おうか。
女 ヒュー、待つてました！
男2 キング、食えるか？
男1 …逆にちよつと入れたいな。
男2 そうか。じゃあ、ミルクィ、そのバーベキューセットプリーズ。
男1 なに！
男2 うちのビーフ。パティにも使つてる、契約農場のステーキ肉だ。
女 ゴージャス！
男1 うええ。

女 海の上でもバーベキューなんて、まさにフリーダムだわ。
男2 だな。ほれ、何でも焼いていいぜ。俺はマシユマロと…。
女 あー、いいわね。あたしはリンゴ…。
男2 キングはどうする？
男1 食わないのもフリーダムか？
男2 ちよつと入れたいんじゃないかなかったのか？
男1 ちよつとじゃねえだろ、これ。
男2 そうか？
女 意外と少食ね。
男1 飲むか？
男2 ウイスキー。
男1 あるよ。ミルクキーは？
女 ビール。
男1 じゃ、俺も…はい、皆さん、行き渡りましたか。
女 はいはい。
男1 では、三人の再会を祝して。

三人　カン・パーイ！（飲む）…ふう。
男2　大丈夫か？キング。
男1　ああ…オーケイだ。しかし…。
男2　うん？
男1　これ…梵ちゃんのヨットか？
男2　そうだよ。
男1　すげえじゃん。
男2　欲しかったら、キングだつて持てるだろ。
男1　いやあ、このヨット維持してさ、海まで出ようつていうヤル気がさ…すげえよ。
男2　別にねえよ、ヤル気なんて。むしろ、その逆でさ…。
男1　逆…？
女　　女だけじゃないんだよ。奥手なのは…。
男2　…。
女　　万事ヤル気になれないんだ。正直なところ。
男1　なにそれ？
女　　昔、言つてたの、この人が…ちよつとヨットの上で。

男1 ふーん、そんな風には見えないけどね。…狙った女はモノにする。事業を起こせば大成
功。趣味はヨット。

男2 ああ…。

男1 ヤル気のない人間にはちよつと無理だ。

男2 え…いや、狙った女たつてミルキーだけだし…それに…。

女 あたしは特別なんでしょ？梵ちゃん。

男2 ああ…リアリティーがなかったんだ。妙に。

女 …ひどいでしょ。ホント。(男1に)

男2 何か…もう、人間離れた…作り物みたいな…。

女 お人形さんみたいにカワイイつてことかしら。

男2 そうじゃない。

女 ひどいわ。

男1 まあ、彼女にだけは情熱が持てたわけだ。

男2 …そうだね。

男1 仕事や趣味は？

女 この人はね…人間が嫌いなよ。

男1 へえ、社交的に見えるけどね。

男2 そりや、工作上必要な人には愛想よくするよ。まあ…それ以外は楽なもんさ。

男1 楽？

男2 ああ、オーナーっていうのは最初こそ大変なんだけど、軌道に乗っちゃえば従業員をコマみたいに使っただけでさ…個人的な人付き合いなんかいくらでも避けられる。ヨットは…。

女 海に出れば、一人になれるからでしょ。

男2 ああ…そうそう。

女 私ならゾツとしないけど…こんな広い海の上で一人だけなんて。

男1 そういえば…。

男2 うん？

男1 ハイスクールじゃ、俺としかつるまなかつたよな、梵ちゃん。

男2 ああ…。

男1 何で、俺とは付き合う気になつたんだ。

男2 うーん…好感が持ってたんだよな。

男1 好感？

男2 人間関係をモノともしないで、次々と女を使い捨てていく、あの軽快さにね。…さ、そろそろ焼けたぜ。

全員、食事を始める。

男2 だからさ…本当に世界がキングとミルクィだけで完結してればいいのにつて…思ったよ。

ここで男2、ギターを弾き始める。

男2 明日から仕事か…嫌だね。

女 オーナーなんて楽な仕事なんでしょ？いいじゃない。

男2 死んでしまおうかな。

女 やめてよ。

男2 ずっと思ってたんだ。この世の中にいる人間の群れを全滅させたら、俺自身どんなにかサッパリするだろうって。

女 全滅？

男2 うん。

女 ご勝手な理屈ですこと。

男2 分かってるよ。

女 あのね、この世に人間がいなくなったら、誰があたしの歌を聴いてくれるの？

男2 ご迷惑ですよね。

女 ええ、ご免被りたいわ。

男2 だからさ、思いついたわけね。俺がいなくなれば、人間もいなくなるんだ。

女 ……？

……で、男1、いびきをかき始める。

男2 ……薬、効いたのかな。

女 え……。

男2 ウイスキー、しかもショットしか飲まないんだよな、キングつて。だから、ちょっと薬混ぜても分からないんだよ。

女 何言ってるの…。

男2 だからさ…考えたんだよね。人間なんかさ、結局、俺の頭の中にしかないんだよ。つまり…。

女 薬って…。

男2 はい？ああ、ハルシオン。眠り薬。

女 やめてよ…何の冗談？

男2 冗談…？本気だけど(笑)

女 本気って…やめて…。

男2 何を？(笑)

女 こんな誰もいない沖で…眠り薬って…。三人で心中でもする気？

男2 いや…どうしようかなって。

女 ふざけないで。

男2 いや、だからさ…俺が居て、俺が感じてるから人間が居るんだ。俺が死んでしまえば、人間なんて居たのかどうかも分からない。ただ…。

女 ただ…？

男2 感情とか思い出とかね…。こいつが…俺をこの世界につなぎ止めているんだ。ミルクィ
やキングに対する…感情や思い出。…だからさ！

女 は…はい！

男2 そういう執着を断つてしまえば…俺は、俺も人間も全滅させることが出来る。

女 執着を断つて…あの。

男2 死んでもらえませんか？

女 嫌です。

男2 だよね。

女 残念だけど、みんなあんたの頭の外に住んでるのよ。あんたの機嫌で生かされたり殺さ
れたりしてたまりますか！

男2 …矛盾なんだよね。

女 はい？

男2 殺したくないんだよ、君たちを…。俺の頭の中に住んでいるだけの君たちに、俺の行
動は支配されている。

女 働きすぎよ。疲れてるのよ。お腹空いてるんじゃない？ほら…お肉食べて。あ、確かク
ーラーボックスにビールが…。

男2、男1が飲んでいたビールを拾い上げる。

男2 死なせてください。

女 え。

男2 俺、これからこのカレー食べます。で、寝ます。

女 はい。

男2 寝たら、海に落としてくれ。

女 嫌よ。

男2 は？

女 私、殺人犯になっちゃうわ。

男2 黙つてりや分らないよ。

女 疑われるわよ。デビュー前の私のキャリアに傷を付ける気？それに…。

男2 え。

女 梵ちゃんが居なくなったら…帰れないわよ。

男2 ここ、まだ電波があるから携帯が使えるよ。救助に来てもらえば？低気圧来る前に。
無線もあるぜ。

女 もう、迷惑かかる死に方しないで！どつかで勝手に死んで！

男2 …。

男1 死んじやうの？

男2 え。

男1 人間は…梵さんの頭の中にしかないんでしょ？

男2 あ…うん。

男1 じゃあ、居させてやれば。

男2 居させてやるつて…。それよりお前…薬…効いてないのか。

女 嫌な目に、遭ったのかな？

男2 は？

男1 人間に、嫌な目に遭わされたんだろ？だから、人間なんか居なくなればいいと思ってるんだろ？

男2 そうなのかな…でも、いい思い出もあるんだぜ。キングやミルクィや…。

男1 でも…人間に価値を感じない。

男2 そう…：そうなんだ。

女 ホントはね、人間なんて居ないのよ。

男2 は？

男1 そこに、一匹一匹、生き物がいるだけだよ。

男1 いないモノから自由になろうってんだから…。

女 そりゃ無理だわ。

男2 それは…理屈だ。

男1 じゃあ、自分の頭の中にしか人間が居ないってのも理屈じゃないのか？

女 それも手前勝手な。

男2 …。

男1 あのね…梵さんは…思ったほど人間と関係ない。

男2 関係…ない？

男1 人間は、君の頭の中に居るだけだ。

女 居るだけ。

男1 居させてやれ。

男2 …居るだけ。

男1 それから…。

男2 …なに。

男1・女 人間≠世界（人間イコール世界ではない）

男2 人間≠世界

男1 世界ごと人間を消してしまうのは、もったいないよ。

男2 …。

男1 世界が。

男2、突然ギターを奏でる。「人間≠世界」をテーマに三人は歌う。

歌の最中、男1と女は向かい合う位置に動く。

女 それは、間違いないの？総統がユダヤ人だなんて。

男1 数年前から囁かれてきた噂だ。私も信じていなかった。だが、親衛隊情報部が上げて

来た今回の情報…間違つてはいないだろう。

女 そんな…総統にユダヤ人の血が入っているなんて。

男1 私の胸の中だけにしまっておこうかと思ったが…エヴァ、総統の実質的な妻であるあなたにだけは話しておくべきだと思つてね…。

女 …。

男1 エヴァ…最近、僕は夢を見るんだ。

女 夢？

男1 殺すんだ。ユダヤ人を次々と。

女 …。

男1 誰かが命令するんだよ。(男2、ヒトラー調に演説のマイム)この世の諸悪の根源であるユダヤ人を抹殺しろつて。僕は首尾よく命令を遂行して、その誰かから表彰される。勲章ももらう。僕はますます張り切つて、ユダヤ人を殺し続ける。…で、夢の最後に誰かがこう言うんだ。ついにユダヤ人を全滅させる時が来た。最後のユダヤ人は…彼自身だ。(男2に人差指をピストルのように向ける)

女 …そんな。

男1 僕は彼のこめかみにピストルを当てて、勝利万歳と叫ぶ。引き金を引く…そこで、目が覚める。

女 …何て恐ろしい。

男1 ほら、今だつて聞こえる。ユダヤ人を殺せ！（男2、演説）

男1、その場にうづくまる。

女 どうしたの！？

男1 恐ろしいんだエヴァ、僕がついに夢の通りに仕遂げてしまいそうな気がして。

女 ダメよ！

男1 総統がユダヤ人だと気づいて、分かった事がある。本当は…ユダヤ人なんていないんだ。

女 …え？

男1 …汚くて小狡いユダヤ人は、僕の頭の中にしかないのさ。ああ、ちきしょう！僕を殺

して、僕の頭の中の汚いユダヤ人を全滅させてやる。勝利万歳！

女 …。

男1 ピストルを…自決用のピストルを…死なせてくれえ…。

女 わかったわ。

男1 え。

女 私も死にましょう。

男1 …エヴァ。

女 彼がユダヤ人だと分かった以上、愛し続けることは出来ないわ。だからといって…彼と

離れて生きて行くことも出来ません。

男1 そうか。

女 汚くて、小狡いユダヤ人は私の頭の中にも…。

男1 …。

女 全滅させましょう。

男1 ああ…では、自決用のピストルを。

女 ええ。

女、ピストルの準備を始める。

男1 なあ、エヴァ。

女 なに。

男1 いま考えたんだが、この方法は非常に良いやり方だと思わないかね？ひとりひとり、ユ

ダヤ人を殺してゆくより、ずっと効率的だ。

女
そうね。

男1
生まれてから、ここまで生きてきたが、人生なんてどれほどの事があっただろう。この地

上なんぞさつきとユダヤ人に明け渡して、我々はもつと無制限で自由な世界に…。

女
はい、弾は込めてあるわ。(トレーに載せてピストルを渡すそぶり)

男1
ありがとう。

女
じゃあ、やりましょう。

二人、こめかみに銃をあてる。

男1
勝利バンザ…あ、ちよつと待つて。

女
なに。

男1
死ぬ前に一杯お茶が飲みたい。

女
いいわ。

女、お茶を淹れるそぶり。

男1　なあ、エヴァ。

女　なに。

男1　いま考えたんだが、死を前にした一杯のお茶、これはとても重要だとは思わないかね。

女　そうね。

男1　精神はこの世界を離れたがるが、身体は生命を手離からだしたからないものだ。その執着を

わずかながら和らげるのが、この一杯のお茶というわけだ。

女　砂糖はいらなかったわね。(トレーに載せて渡す)

男1　結構だ。…では、勝利バンザ…(カップを口に運ぼうとする)そうだ。

女　なに。

男1　お茶受けが必要だ。…そこの棚にウエースが。

女　ああ、はい。

男1　マイセンに盛ってくれ、生クリームを多めに。

女　はい。

男1　では、勝利バンザ…あ、待って待って。(頬張りながら)

女 なに。

男1 ゴーフレットあったよね、その棚のカンカン。うん、隠しておいたの。

女 これ？

男1 それそれ。ユダヤ人全滅させるのもいいけどさ、これ全滅させないうちは死ねないよね。

二人、「全滅、全滅」といいながら、ゴーフレットをむさぼり食う。と、男1、突然もだえ苦しみ出す。全滅を叫びながら絶命。それを見おろして立ち上がる女2。舞台中央に進み出る男2。

女 これで良かったのね。

男2、頷く。

女 全部あなたの言う通りにしたわ。この毒入りのお茶菓子、ちよつとヒヤヒヤもんだっただけ……。前もってもらった解毒剤がちゃんと……。あ……。ああ……。

女、絶命する。

女 裏切り者…ユダヤ人…。

女、醜く悶えながら死ぬ。男2、しばらくその様子を無感情に見おろしているが、手近のゴーフレットを拾う仕草をする。

男2 …全滅。

男2、ゴーフレットを口に運ぶ。膝をついて倒れる。

男1と女、うなされながら目を覚ます。非常に暑そうな仕草。男2はピクリとも動かない。
男1、生あくびを繰り返す。

女 あー…。

男1 …。

女 嫌な夢だった。

男1 ミルキーさんも？

女 ……あたしはハイジになりたかっただけなのに。

男1 「物騒な夢でしたよ。全滅がどうか…。」

女 え、同じ夢…。

男1 ……この、紙。メモ？（自分の頭があつた位置を指差す）

女 うん。

男1 全滅とか書きました？

女 だから、ハイジ。…あと、アメリカン。

男1 僕は…彼女と会いたい…ってのと。

女 プーさん？

男1 そうそう。

女 てことは…。

女と男1、男2を睨む。

男1・女こいつの趣味か。

女 けえ！（男2を蹴飛ばす）

男1 あ。

男2、ごろりと転がる。女、男2の頭の下を調べる。メモを発見。

女 全滅…。

男1 やつぱり。

女 全滅…全滅全滅全滅全滅全滅全滅全滅全滅全滅…見て。（男1にメモを渡す）

男1 うわ…びつしりだ。

女 執念ね。

男1 こりや、悪い夢も見るなあ。

女 何か…あー…もう。（立ち尽くす）

男1 …ええ。

女 ビール飲みたい

男1 ああ…サウナですね。これ。

女 ビール欲しくない？

男1 水ならありますけどね。

女 あー…。

女、ガサガサとビニール袋を探す仕草。自分の分を確保し、男1に水を渡す。

女 梵さん。

男2 …。

女 起きて…水飲まなきゃ死んじゃうよ。

男2 …。

女 …死んでる？

男1 え！

男1、男2に近づく。

男1 …息していますよ。

女 でも、目…覚まさないよ。

男1 ああ…。

女 いやいよ、昏睡状態ってやつかな。

男1 ああ…そろそろなんですかね。(大あくび)

女 眠いの？

男1 …ええ。

女 起きたばつかなのにね。

男1 さつきからあくびが止まらなくて…。

女 それで眠ったらさ…。

男1 …。

女 もう…起きないかもね。

男1 …ですね。

女、あくび。

女 …やっぱ、そろそろなのかな。

男1 ええ。

女 …。

男1 …。

女 …寝よつか。

男1 …はい。

二人、横になる。

男1 先にお別れ言っておきますね。

女 …うん。

男1 さよなら。

女 …さようなら。

二人、眠りにつく。

と、三人、起き上がる。片手にカクテルを持つ仕草。突然、大笑いする。

女 もう…ホント、冗談キツイわ。ボンちゃん。

男2 やっぱ、やりすぎた？

女 本当に殺されるかと思っちゃった。

男1 いやあ、まんまと眠っちゃったぜ。

女 ホントに薬入れたの？

男2 入れるわけないだろ。

女 だよねえ。

男2 キングが見事に寝込んでしまったからさ…ちよつとイタズラしてやろうと思つてさ。

男1 ぜんぜん気づかなかつたぜ。

男2 でも、ホントに泣き出すとは思わなかつたよな。

女 だつて。

男1 そりやそうだぜ、ボンちゃん。助けも呼べない海の上でさ、殺すの殺して欲しいのつて言われたらさ。

女 泣くわよ。

男2 そりやそうか。

女 うーん、それにしても…最上階もいいけど。

男2 ラウンジも悪くないね。

男1 ここまで飲んでりや悪酔いしなかったかもな。
女 そうよ、最初からここに来れば良かったのよ。
男2 はは、じゃあ、同窓会二日目の夜に。…乾杯。
三人 乾杯！（カクテルを飲み干す仕草）
男2 ふう…よし、じゃあ、明日はどうしようか？
男1 え？
女 明日って…。
男2 いや、だから、明日の予定。
男1 仕事は？
男2 休む。
女 大丈夫なの？
男2 俺はオーナーだぜ。誰も責めやしないさ。
男1 そうか。
女 じゃあ、あたしも休んじゃう。いいわよね、プロデューサー。
男1 オーライだ。
男2 キングはどうする？

女 もちろん、OKよね？

男1 僕かあ…僕は…。

女 うん。

男1 帰るよ。

男2 ええ！

女 なんでえ？

男1 そんな急には…休めないよ。

男2 何言ってるのさ、ビバ・テレビの売れっ子Pが。

女 そうよ、公務員とかじゃないんだから。もっと自由に！

男1 だめだよ。僕は…だめだよ。

男2 なあ…キングいなきやつまんないよ。

女 そうよ。

男1 ごめんな。明日は二人で楽しんでよ。

男2 …キング。

男1 じゃあ、僕、そろそろ戻るね。

女 え！

男2 まだ早いじゃん。

男1 明日、仕事だから。

男2・女…。

男1 じゃあね、今日は楽しかったよ。

女 …真面目だね。相変わらず。

男1 (亡くなった彼女であることに気付いて) え…うん。…それしか、取り柄ないですし。

女 帰っても平気なの？

男1 …でも、自由になれって。

女 なった？

男1 ならない。でも…このままだと、死んじゃう。

女 また、戻って来ちゃうんじゃない？

男1 …どうしたらいいのさ。

男2 彼女？。

男1 …ええ。

男2 良かったじゃん、帰って来たんだ。

女 もう、どこへも行かないから。

男1 うん。

男2 さあ、じゃあ、もう一度乾杯しようぜ。(皆のグラスにシャンパンを注ぐそぶり)

男1 あ、いや…。

男2 飲みなよ。まだ早いじゃないか。

男1 明日…仕事…。

女 帰るの…？

男1 …。

男2 さあ…。(酒を注ぐ)

男1 じゃあ…一杯だけ。

男2 そう来なくちや。…じゃあ、二人の再会を祝して…乾杯！

三人 乾杯！

男2 いやあ、目出てえなあ。

男1 ありがとう。

男2 そういえばさ、二人の出会いは？

女 やめてよ…照れちゃうから。

男2 いいじゃないか。教えてよ。

女 そうね、あれは…。

男1 あれは、僕が大学を卒業してすぐでしょうか…二人の出会いは12年前。西海岸のヨットハーバーでした。彼女は赤いリボンの飾りがついた、目立つコサージュで胸元を飾っていて…あれは結婚式の帰りだったのかな。

女 うん、友達の。

男1 初めてアメリカを訪れた彼女は、二、三日逗留の予定で、ホテルに向かうバスの時間を知りたがっていた。

男2 そこをナンパしたんだ。

男1 ナンパだなんて人聞きが悪いなあ。

女 ナンパみたいなものよ。

男1 君から話かけてきたくせに。

女 バスの時間を聞いただけじゃない。…まさか、観光案内までしてくれるとは思わなかったわ。

男2 そりゃナンパだね。

男1 ぜ、善意だよ、純粋な。当時、僕はまだ就職もせずにブラブラしていて…バックバックひとつで貧乏旅行。金が尽きたんで、ヨットクラブのバーでバイトしていたんだ。地元のことなんてほとんど知らなかったんだけどさ。

男2 …善意ねえ。

男1 仕方がないから、翌日は二人乗りの小さなヨットで少し沖に出ることにしたんだ。地元のことなんて何にも知らないけど、ヨットなら…。

女 そう、ヨットでね…。

男1 少し…沖に…。

男1、少し俯く。うつむ間。

男1 ごめん…やつは帰るよ。

男2 え、どうして？

男1 仕事があるんだ。

男2 せっかく会えたのに。彼女とさ。

男1 帰ってきたんだから。…また、いつでも会えるよ。ね。

女 会えないわよ。

男1 え？

女 あんたと私は、ここでしか会えないのよ。

男1 ……そうか。そうだったけ。

男2 ここにいてよ。寂しいじゃん。

女 ……。

男1 うん。

男2 よーし、よく言った。乾杯だ！

男1 帰るよ。

男2 え。

女 じゃあ…さよならね。

男1 ああ、さよならだ。

男2 どうしてだ？また会えなくなるんだぞ…彼女と。

男1 仕方ないよ、だつて…。

女 ……。

男1 彼女は…僕の頭の中にしかないんだから。

男1、ヨットの帆を畳む素振り。女、海を覗き込む。

女 うわー、ホントに海だ。

男1 そりゃ、海だよ。

女 何か怖いね。

男1 そうかい？今日は風いでるから…穏やかなほうだよ。

女 うーん、そうじゃなくて。この下、ずーつと海なんでしょ。

男1 うん。

女 怖くない？

男1 …ああ、言われてみればね。じゃあ、戻る？

女 イヤ。

男1 怖いんじゃないの？

女 こんな経験なかなか出来ないから。気がつかない事にするわ、怖い。

男1 器用だね。

女 うん。(笑う)

男1 よし、メシ食おうか。

女 え、ご飯食べるの？

男1 そうだよ。そのバーベキューセットプリーズ。

女 え、なにこれ、カワイイー。(卓上用の小さなバーベキューセット)

男1 火、起こすからさ、手伝つてよ。

女 うん。

二人、炭をフーフー吹く。そして、二人で咳込む。

女 これ…あなたのヨット？

男1 いや…。

女 ふーん、でもすごいよね。

男1 何が？

女 アメリカまで一人で来てさ、ヨット出してさ、バーベキューまでやつちゃう、このヤル気がね…。

男1 別がないよ、ヤル気なんて。むしろ、その逆でさ…。

女 逆…？

男1 万事ヤル気になれないんだ。正直なところ。

女 ふーん、そんな風には見えないけどね。…あたしをナンパして、海まで連れて来て。あとは、何されちゃうのかしら。

男1 なんにもしないよ…。

女 あら、そう。

男1 君は…なんていうか…現実感がなかったんだ。妙に。

女 なにそれ。

男1 何か…もう、人間離れた…作り物みたいな…。

女 お人形さんみたいにカワイイってことかしら。

男1 そうじゃない。

女 ひどいわ。

男1 あ…。

女 なに？

男1 肉…忘れた。

女 うそ。

男1 酒とマシマロしかない…。

女 いいじゃんマシマロ、焼こう。

男1 えー、ごめん。

女 お酒飲んで、こうやって楽しく話せば、お肉なんていらないわ。

男1 やっぱり…。

女 ん…？

男1 君となら、居られる。

女 なに？口説いてんの。

男1 僕はさ…人間が嫌いなんだ。

女 へえ、社交的に見えるけどね。

男1 うーん、深く人間関係を結ぶのが嫌いなんだよ。遊びで付き合うなら、僕って楽しい人間よ。

女 あら、いやなカンジ。(笑う)

男1 ヨットは…海に出れば、一人になれるからね。

女 私ならゾツとしないけど…こんな広い海の上で一人だけなんて。

男1 何かね…。

女 うん。

男1 ずっと夢を見ているような気がするんだ。

女 夢？

男1 そう。…全てが他人事みたいな感じ。

女 へえ。

男1 だからね、人間が持つてくる感情が、僕には面倒事としか思えない。好きとか、嫌いとかさ。

かき。

女 哀れね。

男1 そうかな。

女 好きとか嫌いとか、あるから人生は楽しいんじゃない。

男2 それが畏さ。

男1 え？

男2 君は好きなんだろう、泣いたり、笑ったり、怒ったり、感情を動かすのが。

女 そうよ…好きよ。

男2 疲れないか？

女 何が？

男2 男に振られたと言つちやあ泣き、腹が空いたといつては不機嫌になり、誰それに無視されたから怒る…毎日。でも、不思議だ。人間は、次に何かいいことがあるかもしれないと信じてしまう。

女 そりやそうよ。実際にそうなんだから。

男2 そう、そして実際に起こる。良いことが。喜びは人間を有頂天にするが、その高みは、次の絶望に突き落とされるための準備に過ぎない。失恋、空腹、友人の裏切り、病氣、怪我、疲労、解雇、肩こり、老化、離婚、熟年離婚、自分の醜い顔。

女 何て暗い考え方をするの。そういうのをひつくるめて人生なのよ。

男2 そういうのをひつくるめて、人生だつていうのならさ。人生そのものを止めてしまえば、いつそスッキリする。

女 あんた、生きていたくないの？

男2 僕が嫌なのはこの心の揺れだ。快から不快へ、不快から快へ。このサーキットをバカみたいに何周もしているうちに、いつか疲れてしまったんだ、僕の心は。な。(男1)

男1 え？ああ、まあ。

男2 だったら、人生そのものを止めてしまえばいい。世界はこの頭の中にしかないんだから。人生を止めれば、世界も止まる。僕が死ねば、世界なんかあつたかどうかとも分からない。
い。
女 ……
男2 どうだい、スッキリするだろ？
女 あんた、よっぽど面倒臭がりね。
男1 ああ、そうかもしれない。
女 いいわ、じゃあ死んだらいいわよ。ただね…。
男1 うん？
女 あんたが止まれば、あんたは止まるのよ。
男1 当たり前だ。
女 そうすれば、あんたなんて居たかどうかともわからないわ。
男1 ……
女 自分の頭の中に、自分ひとり居させてやれないんだから。そんなヤツは誰の頭の中にも居させてはもらえないわよ。
男1 ……

女 消えなさい。足跡ひとつ残さず。誰かに聞かれたら、あんたなんか知らないって言ってあげる。

男1 …。

女 親はいる？親戚は？

男1 いるよ。

女 じゃあ、良かったわね。親と親戚がいるうちは、この世界にいたことにしてもらえるわ、こんなあんたでも。友達や彼女は？

男1 …。

女 いやしないか。さらっと遊んでさようならって人だもんね、あんたは。

男1 …。

女 もういいや…船を戻してちょうだい。寒い。

男1 …。

女 ちよつと、聞いてんのあんたは。早くして。

男1 …。

女 は…まさか、手始めにあたしから消す気じゃないでしょうね？や、やめてよ…あたしには夢も希望も親も親戚も友達もいるんだから…彼氏は居ないけど。

男1 …マシユマロ。

女 …え？

男1 マシユマロ、焼けたぜ。

女 …。

男1 食わなくていいのか？

女 …食べる。

三人、グラスを手に持つ姿勢に戻る。

男1 それから、僕は彼女に執着した。彼女は僕の頭に住み着くことに成功し、僕も僕の中で住み着くことが出来るようになった。僕の感情は振幅を増し、今まで以上に快感と不快感を往復するようになった…にもかかわらず。

男2 疲れは感じなかった。

男1 ああ。やっと、世界に住めるようになったんだ。

男2 さすがだね。女は偉大だ。

男1 …ところが…。

女
…。

男1
…彼女が死んだ。突然。

女
…。

男2
どうしてさ？事故かなんか？

男1
知らない。自殺ってことになってるけど。

男2
ねえ、どうして？（女に）

女
…。

男2
本人いるんだから聞いてみたら？

男1
…。

男2
ねえ、どうして死んだの？

女
あんたが殺したんじゃない。

男2
え？

女
あんたが出て来て、この人に自由とか全滅とか吹き込むんだから…この人の考えが
変わるたびに、私は生かされたり殺されたり。

男2
そーだっけ。

女
全部、この人の頭の中の出来事。あたしなんか、居たかどうかも分からない。

男2 ……どういふこと？

女 この人は死にたいのよ。理由が必要なのよ。だから、都合よく作ったのよね、私もあなたも全滅させてしまうために。…この人をこの世につなぎ止めているのは、私達しかいないんだから。

男2 えーつと…だから…。

女 あんたは、この人の頭の中の登場人物。

男2 つまり…僕は。

女 本當にいたかどうか分からないわ。

男2 死にたい僕も…アメリカ人の僕も…。

女 そうよ。

男1 ……そうだっけ。

女 そう。

男1 ……。

男2 明日は、どうする？

男1 え？

男2 もういいや、そんな事はどうだって。…君はキングで、お前はミルキーだ。

男1 …うん。

男2 とりあえず、今日はもう一泊するつもりだ。明日は…どうしようかな。

女 すればいいじゃん。何泊でも。

男2 そうね、いつまでだって…居られる限りは。

女 明日はビーチの方に行ってみない？

男2 ああ、いいね。行こう。…キングは、行かない？

男1 …。

男2 どうする？

男1 …どうしようかな。

男2 ここに居るのも、悪くないぜ。

男1 うん…でも…帰るよ。

女 ちゃんと、帰れる？

男1 難しそうだけど…自分も他人も消さないでいるのは…でも、まあ…。

女 …。

男1 戻ってこないように、努力してみる。

男2 真面目だなあ、キングは。

女 じゃあ、お別れだね。

男1 また、会おうよ…だいぶ、先になりそうだけど。

女 ……そうだね。

男1 梵ちゃんも。

男2 ああ、じゃあ、しばらくここで遊んでるわ。

男1 ああ。

男2 待つてるぜ。

男1 ああ……さよなら。

男2 さよなら。

女 さよなら。

ばたりと倒れる男1。男2と女、正面を切る。男1、男2と女がしゃべりだすと同時に腹ばいになって苦しそうに動き出す。「暑い」、「水」、「仕事行かなきゃ」…などと呟きながら。そでに向かつてはける。

男2 それつきり、キングは僕らの前に姿を見せなくなった。

女 もう、このクラブハウスに何泊しているだろう。

男2 今では、あいつが居たのかどうかさえ、キングという友人が俺たちの間に居たのかどうかさえ分からない。

女 別に、毎日楽しいからいいんだけど。

男2 僕たちは、来るのかどうかも分からない友人を待ちながら、今日も遊び疲れて眠る。

女 キングさん、今頃なにやってるんだろう。

男2 仕事じゃない？

女 そうだね。きっとそうだ。…あの人、真面目だから。

男1、はけ切る。

完

※本作品を使用して上演する場合には、事前に権利者の許可を受ける必要があります。また、上演したものを記録する場合は、作者に上演ならびに複製(記録映像作成)許可料を支払うことで、脚色・改変等含めての使用と、上演したものを映像等に記録することが出来るようになります。

○上演ならびに複製許可料について

アマチュア・学生団体の無料での公演でも、原則として 5000 円を頂戴します。プロの団体の公演(有料・無料問わず)、及び、アマチュア・学生の団体の有料での公演については、座席数・ステージ数・チケット料金等を考慮して金額を提示させていただきます。

○非営利・無料・無報酬での上演

著作権法第 38 条 1 項により、非営利・無料・無報酬での上演について、無許諾かつ著作権使用料無料での上演は可能です。ただし、第 50 条の「著作者人格権に影響を及ぼすものと解釈してはならない」という条文により、これには以下の条件が付加されます。

- ・ 作品名と作者名を明示する。
- ・ 台本に変更を加えない。題名も変更しない。
- ・ 上演の映像・音声記録をしない。またそれを勝手に複製して配ったり販売したりしない。
- ・ 非営利な活動である。(営利団体からの協賛・後援等も受けない)
- ・ 入場料などを受け取らない。(おひねりやカンパ、グッズの売り上げも含む)
- ・ 上演に際して、誰も報酬を受け取らない。(交通費など最低限の実費は除く)

以上の条件を満たせば、著作権法上は作者に断りなく本作を上演できます。

しかし、できることなら以下までご連絡頂きたく。



劇団！王子の実験室

O-Ji laboratory

主宰 田口 浩一郎

Koichiro Taguchi

〒231-0054 横浜市中区黄金町2-7先 黄金スタジオD
Tel. 090-4926-9732

✉ oozino@icloud.com



よろしくお願ひ致します。